

le petit matin

別れの朝

クリスチーヌ・ド・リヴォワール
三輪秀彦訳



Hayakawa Novels

LE PETIT MATIN

by Christine de Rivoyre

Copyright © 1968

by Éditions Grasset

First published 1974 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is Published in Japan

by arrangement with

Rosica Colin Ltd, through

Charles E. Tuttle Co., Inc.,

Tokyo.

別れの朝

昭和49年9月30日 初版発行

著 者 C・ド・リヴォール

訳 者 三 輪 秀 彦

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京 (254) 1511~8

振替 東京 47799

印刷 信毎書籍印刷株式会社

製本 株式会社 明 光 社

定価 1000円

0097-901070-6942

別
れ
の
朝

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1974 Hayakawa Publishing, Inc.

母
に

……二種類の人類、つまり人殺しをした人たちと、人殺しをしなかった人たちしか存在しないことを理解すること。

コレット

『純粹と不純』

神が死んだのはたぶんそのためだろう、あまりにも愛しすぎたために、とりわけ決して知ることのないある人を愛したために、そしてその愛からすべてが生れたのだ。それ故にこそ世界は呪われているのだ。

アレクサンドル・カルダ

『欲望』

一九四一年十二月——一九四二年八月

朝まだき、あの乗馬の男。黒の濃い柏に調和した軍帽を被り、不動の姿勢。彼はわたしの鹿毛色の牝馬ケレルに乗る、ケレルは頭をやさしく動かして、いやいやをする、癖ではなく、苛立ちの合図だ。納屋のかげにわたしが身をかくしている場所から、ケレルの植民地生れの目をよぎる雲が見抜ける、彼女の横腹を走る身ぶるいが想像できる。ケレルはもう我慢できないのだ、この六歳のアングロ・アラブは夜明けに酔いしれている。わたしが乗っていたら、わたしたちはすでにムールロスからここピニオン・プランまでギャロップで走っているだろうに。でもあの乗馬の男は父に忠告を求めた。太陽時間の七時に、彼はナラの厩舎を離れた、彼は七時半にならなければギャロップをかけないだろう、わたしは彼の散歩の道筋をたどることができる——この時間には洞窟のように薄暗い〈狂人〉の谷間まで並足、波形のヒースのあいだで白い骸骨のような砂の本馬場の入口まで、なおも並足、マロットを過ぎてからトロット、空は少しづつウルトラマリンから灰色へと変色し、松林はケレルを御する男のために割れる、彼はケレルにフランス語で話しかける。だめだめいまはだめだおとなしくしろケレル。彼は〈ゲレル〉とかヘゾワ・ザーシュンとか発音するのかしら？ だからといってどうなの？

彼はわたしの牝馬に乗っており、わたしは彼が大嫌い。わたしは彼より先に出かけようと急ぎ、ウラガンに乗った、この馬はすぐに後脚で蹴るのでわたしはサーカス馬と呼んでいる。おまけにその毛並のせいで南瓜とも呼ぶ、栗毛の馬なのだ。六時にこっそりとウラガンに鞍をつけた。外は真暗闇だった。ケレルを見捨てるのが恥かしかつたが、彼女の逮捕と名づけていたことに立ち会う勇氣はなかった。ケレルのでっかい目が馬小屋の仕切りの柵ごしにわたしを待ちうけていた。ウラガンの方は次から次へとお芝居を發明してくれた、銅葉桶をひっくり返したり、わたしのトレンチ・コートを噛んだり、くつわに歯で錠をかけたり、それから腹帯をかけるときお腹をふくらませたりした。ワニみたいなウラガン、いまにぶつわよ。ケレル、心配しないで、後でまたすぐ会えるわよ、わたしの半黒ちゃん。いまがそのときだ。あの乗馬男はわたしが予想した通りに、ピニオン・ブランの葉のない樹木の下から突然に姿を現わす。彼の背後では、果樹園も、畠も、すべて腐り果てている——戦死した兵士のように枯れたトウモロコシ、くらげみたいなキャベツ、煮られてべとべとのダリア。あの男も腐るといい、ケレル泥棒、馬泥棒め。彼はわたしを見て、手綱をひく、ケレルはうなだれて、首を振る、例の肩のしぐさ、ああ、すてき。パパなら油をよくさした控え棒と言うだろうが、わたしはやはり半黒ちゃんと言う。彼らは前進してくる。ウラガンはスパイごっこに疲れているし、それにケレルはいきり立っている、わたしは降参して、緑色の泥棒に挨拶するほかはない。わたしは納屋を離れて、畠へ向かう。ピニオン・ブランの古い田畑がすべて行く、荒壁土やY字型の大梁、新しい家、矢はず模様の煉瓦。小屋がいくつもすべて行く、洗濯物をかくしておく小屋、そして戦争なのに、ほろほろ鳥、卵をかえす牝鶏、野兎、豚用の鍋、松の薪、一本の手が鎧戸をそと開く、薪を割っている薪割台の近くからひとつの影が消える、ブルドッグに似た狎（わ）犬たちが吠える。この犬たちは二つの名前にし

か返事をしない、牡たちはパピヨン、牝たちはポルカ。杜松のかげから猫たちがとび出す、彼らは一度も名前を持ったことがない。猫たちは追い払うほかはない。チュー・ルー・ガット、猫よひっこめ。わたしはチュー・ルー・ボッシュ(野郎)と叫びたいのだが、馬たちへの愛のために、わたしはよろめかない、わたしは前進して、ウラガンが道化芝居をするのをとめる。こちらへ近づくとつれてケレルの前額部の流星が大きくなる、真珠梨に匹敵するその額の上の細長いミルク色の斑点は、彼女の東洋の女王のような美しさをいちだんと際立たせる。馬上の男は優雅にケレルを引きとめる、父ならやはりそう言うだろう——父は神さまありがとうと付け加えるだろう。わたしはほっとする。敵意は失わないが、ほっとする。

「おはよう」

「おはよう、お嬢さん」

彼は黒い底のついた帽子を脱ぐ。帽子なしだと、それほど醜くはない。何歳だろう？ パパは三十代だと言ってたけど、わたしはそんなに年寄りだとは思わない。男としての前額部の流星もまあまあだし、顔色はほかの連中みたいにはばら色ではなく蒼白、目はまん丸ではなく、ボンシユールなんて言わない。

「あなたの牝馬の口はすばらしいですね」

「知ってますわ」

「あの口は……どう言えばいいでしょう？」

「父は絹の口だと言ってます」

「なるほど。この絹の口はあなたのおかげなのでしょう？」

「いくらかはね」

いいわ。いまのところこの男は恐れるに足りない。おくれればながら一睡もできなかったにちがいない。パパを安心させてやろう。部下の将校たちがうちの馬に乗ることになった、と大佐にやさしく告げられたときのパパの顔をわたしは決して忘れないだろう。返事もできないで、窒息したみたいにじっとしていた、擦り切れた脚絆、ボール紙みたいに固くなったレインコート、メランコリーをさくられないために拭おうとしない近眼鏡のパパが、突然に、ひどく年寄りに思えた。わたしと二人きりになると、両手で頭をかかえ、それからパパは、わたしの前では決して煙草をすったことがない父が、パイプをふかしはじめたのだ——あのパイプはどこにあったのか？ それにあのタールくさい煙草は？ 夕方には、寝込んでしまった。発熱、腰痛、メロドラマじみた勧告。わたしは母の写真を前にして父のベッドの足もとに坐った、かんかん帽を被り馬乗服を着た母の信じがたい微笑は（死者たちはつんぼの人たちみたいに微笑する）いつもわたしの胸を締めつける。ニナ、一年以上ものあいだ、わしらは幸運にも馬乗りたちを泊めなくてもすんだ、いまその幸運の代金を払うんだ、何事も報いられるのだよ、ニナ。わしはな、最初は台所のかまどの上で、一日中音をたてている大鍋のなかに毒でも入れてやろうかと考えた。それから三頭の馬と一緒に森の奥まで逃げ込んで、戦争が終り、ドイツ兵どもがみんな死ぬまで待とうと考えた。パパの声はとぎれた。やつらの方が強いのだ、もし変な真似をしたら、わしらは馬を失ってしまう、お前はそれでもいいかい？ わたしはパパの手を握った、喜びもなく（わたしは熱の出た体に触れるのが大嫌いだ）、だがやさしく——パパにはわたしが必要なのだ。お願いだから、ニナ、わたしを助けてくれ。わたしはパパを助けている。ドイツ軍のガイドになることは拒んだけれど、時には、非常にしばしば、彼らと顔を合せて、この地方のことや、彼ら

の馬について教えてやると約束した。わたしは従順になると約束した。いまもその約束を守っている。馬に乗ったドイツ兵は元気づけられて、ケレルを讀めつづける。二頭の馬は寄りそって直角を形づくる、わたしは牝馬を愛撫する——たてがみの下の大好きな場所を。中国風の髪をした半黒ちゃん、お前にはわかるかしら？ お前のためにわたしは妥協してのよ。ドイツ兵はゆっくりと問いかける。わたしは急がずに答える。

「ギャロップで走らせてもよろしいでしょう？ まだ早すぎませんか？」

「いいえ、そうなさいな、怖がらないで」

「怖がる？」

その声はふるえている。わたしは何と言ったのかしら？

「そうですわ、ケレルを疲れさせることを怖がらないで、一杯に走らせなさい、手綱を引き締めなさい、自分が自由だと感じれば、それだけうまいきますわ。（わたしはかすかに微笑に近いもので顔を歪める。）それだけあなたとうまいきますわ」

「あなたの後を走ってもよろしいか？」と男がたずねる。

「どうぞ」

ウラガンは理解した。彼はわくわくして、羊犬に衝突する。犬は両肩のあいだに首をすくめて、口汚なく吠えたてる。わたしたちは容赦なくあひるの一群をピョン・ブランの橋の方へ追いたてる。雨で増水した河の水はにせのオランダがらしで飾帯を無理におさえつける。馬たちは全身これ血、神経、期待だ、彼らは本物の生の断片を生きようとしている。それは向う岸の森の大寺院の入口を越えたら終るだろう。いまそこへ来た。四本の道、四筋の張間、^{はりま}三本目がいい。わたしはウラガンを駆り

立てる、彼はトロットで走り、狂喜する、そしてケレルの乗り手はわが家特製の跳躍を見物できる。栗毛馬のお尻が持ち上げられ、また落ちる、わたしはこらえる、手綱をしっかりと握る、それはいい気持だ。鐙ようの上に立ち上がって、わたしは後ろを振り向く。ケレルもトロットで走り、たてがみが曲った翼のようにたなびいている。調子はいいい？ 騎手は顎を動してうなずく、しかしその全身で、その烈しい気性のすべてをあげて同意するのは、ケレルだ。彼女は動作に柔らかな味をつけ、引き締まった、音楽的な軽いギャロップをして体を前後に動かす。お前は満足なの？ ウラガンはわたしに服従する、わたしは彼を駆り立てたり引き止めたりして楽しんでゐる。スズズズ。ゆっくりと。彼は陽気だ。馬たちの陽気さ、わたしに残された唯一の陽気さ。わたしは陽気な馬の首をなでる。森のなかでは、馬のドレスは濡れた羊歯しだの色、白熱した濃いばら色になる。背後では、嬉しげなケレルが身体を伸ばすのが感じられる。あたしの傍へおいで、お前が見たいから。道が広くなる。わたしは騎手に前進して並ぶように合図する、いまわたしたちは隣り合っている、妙な帽子のせいで彼の横顔は鳥のやつかしらみたい、わたしは気にしないけど。彼の手だけは大切みたい、それは軽やかだ、それに脚は動かない。わたしたちは松の若木の二つの海のあいだを一直線になって通り抜ける。わたしが身を傾けると、騎手も真似をする、二頭の馬はわずかに熱狂して空気を突き抜ける、突然に目方が計れなくなった巨像。顔を洗う風のなかで、わたしはジャンのことを考える。

男が一人わたしの方へ歩いてくる、日暮れどきで男は荒野ワビ（方言ではアウグと言う）の丈の高い草のあいだを前進してくる、松の切株を避け、サンゴか死体みたいな、皮をはがれた材木をまたぐ、彼のゴム長靴がたてはげ、たかの音が聞こえる。わたしはそれらの切られた木の一つに腰かけている、